

経過報告

前回以後の経過について報告します。

新型コロナウイルス感染拡大が深刻かつ長期的な問題となっています。日本では「緊急事態宣言」が全面解除されました。国民や医療関係者の懸命の努力で大きな感染爆発を起こすことなく、減少に転じていますが、予断を許しません。今秋にも予想される第2波、第3波に備えなくてはなりません。

ワクチンや特効薬の開発、医療体制の整備は急務ですが、それだけでは済まないのです。地球上には、未知の病原体が無数に存在し、しかも頻繁に変異するのです。新型コロナウイルスについては、その正体が解明されつつあるものの、依然として未知の部分が多いことに加え、国民の命と生活を第一に考えているとは到底思えない政府の対応で、不安が増します。経済市場主義や格差容認、不公平な行政処理など、世論を分断して、対立をあおることで支持基盤を維持してきた政府の姿勢は、多くの人々の基本的な権利を奪ってきました。窮地に陥った政府は、早くも次の分断のタネをまいています。

さて、対人援助である社会福祉現場においては、人との接触を完全に避けることは不可能です。医療現場と同じように、感染リスクは高い状態です。命や暮らしを支える仕事のため、閉所することはできません。むしろ、こうした緊急事態にこそ、その必要性や重要性を問われるのが、社会保障・社会福祉です。現場の職員は、日々自身の感染リスク、自分が感染させるかもしれないプレッシャー、家族への影響など、さまざまな不安とプレッシャーのなかで懸命に職責を果たしてきました。政府は、この数十年、社会福祉・社会保障の予算をカットしつづけ、現場が疲弊する状態を改善することなく、反省する姿勢もありません。

人間の幸福にとって最も大事なものは、親しい人とのだんらんと、好奇心を満たす出会いです。はるか昔から食事は人々をつなぎ、家族や共同体を支え、新しい出会いの潤滑剤になってきました。感染を防止するために孤食を奨励され、移動を制限される事態は、まさに人間の根源的な欲求を押しつぶします。「新しい生活様式」を推奨されても絶望的になります。「離れながらもつながりをもつ」ことが重要です。人々とつながりを持つための情報通信技術の賢い運用は欠かせないですが、人間の心身は直接触れ合わないと、共感や感動を分かち合えないことが予想されます。私たちは、分断工作を企てる政治の動きを監視して、不正やゆがみを正し続けながら、困窮状態に陥る脆弱な社会層への手厚い支援を届け、いく役割を果たしていきたいと思えます。

4月30日、「一般社団法人 社会福祉経営全国会議」が発足。設立総会は、全国各地を結んだテレビ会議でおこなわれました。約3年にわたる議論と準備を経て、権利としての社会福祉を前面にかかげ、社会福祉法人の全国組織が立ち上がったのです。今後の活動に期待したいと思います。

その他については、口頭で報告します。

(2020. 6. 3)

2019年度あおぞら保育園・乳児分園報告書

あおぞら保育園
あおぞら保育園乳児分園
園長 森山俊朗

1. 保育所の運営状況

○あおぞら保育園

所在地 雲南市大東町下阿用691番地2

定員 90名

委託児童 年間延969名（2歳児249名・3歳児204名・4歳児228名・5歳児288名）
月初平均 80.8名

事業 2歳児～就学前保育 延長保育事業 一時預かり事業
放課後児童健全育成事業（学童保育事業）
地域子育て支援拠点事業（地域子育て支援センター事業）

職員定数 園長1（兼務） 主任保育士1（兼務） 副主任保育士1 保育士10 調理員3
事務員1（兼務） 支援センタースタッフ2

○あおぞら保育園乳児分園

所在地 雲南市大東町下阿用208番地1

定員 30名

委託児童 年間延409名（0歳児151名・1歳児258名）
月初平均34.1名

事業 産休明け～1歳児保育 延長保育事業 一時預かり事業

職員定数 園長1（兼務） 主任保育士1（兼務） 副主任保育士1 保育士12 調理員1
事務員1（兼務）

2. 経過・評価

主行事として春先の遠足、笹巻き作り、七夕まつり、海水浴、夏まつり、祖父母参観、運動会、芋掘り、冬祭り、劇団公演、クリスマス会、節分集会等それぞれの季節行事を実施した。年度末になり、新型コロナウイルスの影響で登園自粛や卒園旅行の中止、卒園式の規模縮小と大きな影響があった。関係機関と連携を取り、その時出来ることを知恵を出し、子供たちの安全と保育環境の確保を行うことが出来た。

保育の質の向上の為、施設内研修や雲南保育協議会での研修、全国での研究大会への参加など積極的に参加し広く学ぶ機会を確保した。

施設運営面において本園、分園とも修繕の必要な設備や不足している物品もあるが、限られた予算の中優先順位を明確にしたうえで修繕や整備を行い、安全な施設管理に努めた。

職員の処遇については、年度末の退職者をみこし増員分も含め1名の採用を行った。予定外の退職者が出たため、増員とはならなかったため次年度中途採用を予定している。次年度は職員の定着を図りながら、職員の動向を把握し採用計画を早期に行う必要がある。また、処遇改善加算Ⅱを活用し、組織体制を見直し処遇の改善を努めた。

2019年度 あおぞら福祉会高齢者・障がい者福祉事業報告

統括部長 森山 史朗

1. 総評

今年度は各事業所とも2月中旬ごろより世界的に流行した新型コロナウイルスへの対応に追われることになった。日ごとに対応方針などが変化し、マスクや消毒液等が不足する中で工夫しながら職員は対応を行った。また利用制限や面会禁止など利用者にご負担をかけることも多かった。今後も簡単には終息しないとの予測もあり、長い期間対応する事になるので、事業所での行事や日々の業務を含め工夫をしていきたい。

高齢者福祉事業部門では認知症対応型通所介護事業所「あおぞらの家」は前年度に比べ利用が大幅に減少した。これは、施設に入所される方が多かったことと、2月にインフルエンザが流行し利用制限を行ったこと、2月下旬頃よりコロナウイルスの流行のため利用者が減ったことなどが主な原因である。今後は新規利用者の増加が重要であるが、認知症対応型通所事業所は他圏域でも様々な要因により事業継続が困難となっており、事業の形態や継続を含め中期的には検討が必要となっている。

認知症対応型共同生活介護「とぎしの家」はこの一年で3名の方が新規入所され、平均介護度も軽度になり活動的で安定した生活をして頂くことが出来た。その反面認知症の面で進行がみられ、不穏時の対応などが多くなられた利用者もあった。災害時の対応を課題に挙げていたこともあり、数年ぶりに夜間想定避難訓練を行う事が出来た。

地域密着通所介護事業所「カルチャーセンターあおぞら」は前年度に比べ利用者が増加した。また、認知症の進行に伴い「あおぞらの家」の利用へ移行される方も多く、併用も含めて連携しながら対応する事ができた。

雲南市からの受託事業である認知症予防教室と認知症カフェの運営を行った。認知症予防教室は会場によっては受講者が少ないこともあったが、参加者からは続けて受講したいなどの要望もあった。認知症カフェは主に雲南市役所で行ったが、利用者が固定化され利用人数も前年と比べ減少した。今後は周知方法や内容についても検討し、多くの市民の皆さんが利用して頂けるように改善していきたい。

障がい者福祉部門では生活介護事業所「野の花」は前年度より利用者が減少した。これは施設入所される方や就労支援事業所「尺の内農園」へ移行される方などがあったことが要因であるが、今後新規の利用者を受け入れていく予定である。

障害者共同生活援助事業所「風車の舎」は利用者の入退所もなく穏やかに過ごされた。調理担当者も増え、世話人とも定期的に情報交換をして支援する事が出来た。

相談支援事業所は今年度、新規での障害児相談などが多く、新たに関わる機関等も多く調整等が大変であった。また、9月より事務負担軽減と今後の人材育成を兼ねて兼務職員を配置した。

就労支援事業所「尺の内農園」は2年目となり利用者も徐々に増えたが、予定よりはやや低調であった。新規利用者の増加が今後の課題であり、室内作業の充実や工賃の向上を図っていききたい。就労事業では、お茶部門で新たに和紅茶の加工と新商品の開発に取り組むことができた。また、市内のスーパーなどでの販売も1月より開始する事が出来た。ぶどう部門では収穫はできないが苗の生育は順調で、利用者の農業技術も向上している。次年度以降は圃場の拡大や新たな農産物の栽培や施設の移転新設の準備をしていきたい。

2. 人事採用・育成

2019 年度

退職 高齢者福祉部門

12/31 清掃員 1 名（障がい者雇用）、1/15 介護・調理補助職員 1 名、3/31 介護計画作成担当者 1 名

障がい者福祉部門

7/31 職業指導員 1 名、8/15 生活支援員 1 名、10/31 職業指導員 1 名、10/31 調理員 1 名、看護師 1 名

採用 高齢者福祉部門

4/1 介護職員 1 名、4/1 看護職員 1 名、7/1 清掃員 1 名（障がい者雇用）、7/16 調理員 1 名、9/1 調理補助員 1 名、11/1 看護師 1 名

障がい者福祉部門

4/1 調理員 1 名、5/1 職業指導員 1 名、9/1 職業指導員 1 名、10/1 調理員 1 名、1/1 生活支援員 1 名、1/16 生活支援員 1 名、2/1 看護師 1 名

今年度も退職・採用の多い年度となった。多職種からの転職や障がい者雇用などマッチングの難しさを改めて感じた。一方で多様な働き方のニーズからパート職員を多く採用する事ができた。また、引き続き法人として障がい者雇用の募集を行っていききたい。今後ハローワークと連携し障がい者雇用に取り組みたい。

3. 経営状況・分析

○高齢者部門

認知症対応型通所介護事業（あおぞらの家）は利用者の減少から前年比で約マイナス 500 万円と大幅に減収となった。事業収支差額については約 200 万円の黒字であったが、今後新型コロナウイルスの影響等で利用者数がさらに減少すると赤字に転じる恐れがある。

地域密着型通所介護事業（カルチャーセンター）は利用者が増加し前年比で約 250 万円の増収となった。事業収支差額については約 400 万円の黒字であった。

地域密着型生活介護事業（とぎしの家）は利用者の介護度の軽減と用型通所介護利用の減少により前年比で約 120 万円減収となった。

高齢者福祉部門全体で約 790 万円の事業活動資金収支差額となった。

○障がい者部門

生活介護事業（野の花）も利用者が減少した為、前年比で約 350 万円の減収となった。事業収支差額については約 600 万円の黒字であった。

相談支援事業は契約利用者数の増加と報酬改定もあり、前年比で約 30 万円増収となった。事業収支差額については約 80 万円の赤字であった。

共同生活援助事業（風車の舎）は前年とほぼ変わらない収支となった。

就労支援事業（尺の内農園）は前年度に多額の寄付があり比較は難しいが、約 1280 万円の収入となった。農業部門等への初期投資などもあり事業収支差額は約 1000 万円の赤字となった。今後は利用者の確保が重要な課題である。

障がい者福祉部門全体では約マイナス 540 万円の事業活動資金収支差額となった。

2019 年度認知症対応型通所介護事業報告書

老人デイサービスセンター あおぞらの家
管理者 安達 孝平
主任 高木 知永

2019 年度通所介護事業について下記のとおり実績報告いたします。

記

1.事業の実績

①老人デイサービスセンターあおぞらの家

開所日数 361日（前年度361日）
延べ利用者数 3,238人（前年度3,646人）
一日平均利用者数 8.9人（前年度10.1人）
緊急時宿泊者 1人（前年度5人）

②老人デイサービスセンターあおぞらの家（共用型）

開所日数 364日
延べ利用者数 190人（前年度400人）
一日平均利用者数 0.4人（前年度1.0人）

2.主な行事

該当月	誕生日会
4月	花見
5月	チャレンジデー
6月	遠足（出雲大社、出雲空港、佐白温泉）
7月	七夕飾り作り
8月	そうめん流し
9月	敬老週間、よりない作り
10月	国旗掲揚（令和天皇即位のお祝い）、いも堀り
11月	障子の貼り換え、年賀状作り
12月	歳末市民余芸大会、そば打ち、クリスマス会
1月	新年会、初詣
2月	豆まき
3月	河津桜ドライブ
その他	保育園児との交流、避難訓練 家族会

3.総評

2019年度の後半では、利用回数を増やされる方もおられましたが、入所される方が重なり結果として利用人数の減少となりました。新規のご利用者様が増えるように今後も告知活動を行い、受け入れ態勢を整えておく必要があります。健康面では、今年度はインフルエンザに罹られる方がご利用者様、職員含め何名かおられました。そのため、利用制限する日もありました。今後は、より一層手洗いうがい、消毒などの予防に努めていきたいです。

地域の方との交流では保育園児との交流はありましたが、今年度から阿用小学校の生徒さんの人数が少なく、ボランティアクラブとして来られませんでした。あおぞらの家では納涼祭もなく、地域との交流の機会が少なかったように思います。そのため、ドライブや文化祭といった行事に積極的に参加し、地域の方と交流する機会を増やしました。ご利用者の方も普段なかなか参加することが出来ない行事に参加され、とても喜ばれました。今後もマンネリ化しないようにご利用者様が楽しめる活動や行事を考え、提供していきたいです。

4.重点目標の評価

重点目標

- ①他の事業所と連携をとりご利用者の方々のニーズに合わせた交流の場を提案していく。
- ②カンファレンスに多くのスタッフに参加してもらい情報共有に努める。
- ③外出の機会を多く取り入れてご利用者の方々と共に楽しめる企画を考えていく。

経過、評価

- ①他の事業所と連携を取り、ドライブや行事へ合同で参加することができた。交流することで少しでも慣れた環境を作り、他の事業所からの移行もスムーズに行えた。
- ②前年度と比べ多くの職員にカンファレンスに参加してもらうことが出来た。カンファレンスの場で情報を共有することで、ケア方法を統一することや、少しでも利用者様の細かな状態変化を把握することができた。
- ③外出することで地域の文化祭や遠足、ドライブ（桜や紅葉など）といった季節ごとに様々な行事に参加することができ、利用者の皆様と一緒に楽しむことができた。

以上

2019 度

認知症対応型共同生活介護事業報告書

老人グループホーム とぎしの家
管 理 者 上代 由美子
主 任 後藤 章太

2019 年度認知症対応型共同生活介護事業について下記のとおり報告いたします。

1. 事業の実績

開所日数	366日（前年度365日）
延べ利用者数	3,205人（前年度3,179人）
一日平均利用者数	8.8人（前年度8.9人）

2. 主な行事等

該当月	誕生会	9月	敬老会・小学生との交流
4月	花見ドライブ	10月	運動会
6月	遠足（出雲大社・出雲空港 佐白温泉）	11月	紅葉ドライブ
7月	七夕（花火見物）	12月	そば打ち クリスマス会

その他 保育園児との交流 奉仕活動
家族会 R.2.2/16（3事業所合同）
避難訓練
運営推進会議 年間6回開催

3. 総評

とぎしのご利用者の平均年齢は約85歳である。介護度では平均して2.6で前年度は3であった。今年度は3名の方が新たに入居された。一年間を通してご利用者の状態を振り返ると体調面は比較的安定されていたように思う。その反面認知症状の進行がみられ不穏・混乱時の対応が多かったように思う。

日常生活の中での楽しみの一つとして、外部のイベントに参加や、遠足や買い物に出掛ける企画を多くした。出掛ける事で会話がいつも以上に話されたり、生活リズムに張りが出たりと良い影響がみられた。

年度方針に災害時の対応で備えていく事を掲げていた。ここ数年夜間想定避難訓練が出来てなく今年度は雲南消防署から消防士の方に来て頂き指導を受ける事が出来た。それによって幾つかの課題が明確になり次年度に繋げていきたいと考えている。

新型コロナの感染予防対応を行っている。現在面会禁止の対応を取らせて頂いている。いつまで続くのか、また施設内でもし感染が発症したらという不安がある。一日も早く終息して欲しいと願うところである。

重点目標

- ① 水害・地震・火災等いろいろな災害を想定した避難訓練を行なっていく。また、マニュアルを見直しして新たに作成する。
- ② 過ごし易い環境作りを行う。
- ③ 他の事業所と連携をとり交流の場を提案していく。
- ④ 認知症に対しての知識をより深めていく為に勉強会を企画する。

評価

- ① デイサービスと合同で火災を想定した避難訓練を計画し行った。夜間想定を雲南消防署から消防士の方に来ていただき、夜間想定避難訓練を行う事が出来た。また、阿用地区での避難訓練にも参加させてもらう事が出来た。それぞれの訓練で課題点が上がっているのでそれをマニュアルの見直しに生かしていく。
- ② 部屋の飾りを担当者が考えて飾った。部屋のカーテンを新しくして雰囲気を変える事などを行った。
- ③ デイサービスと合同で遠足へ出掛けたり、外部のイベントに出掛ける企画をして参加して頂けた。
- ④ 内部研修として認知症のケアについての DVD を観て知識をより深めていく事を行った。行った後の数日はケアの際に意識しているようであったが、時間が経過すると希薄している傾向もみられた。次年度の課題であると感じている。

運営推進会議（年6回）

議題

- ① H31 年度事業計画 経過報告・阿用地区合同避難訓練の報告
- ② H30 年度事業報告・決算報告
- ③ 経過報告
- ④ 避難訓練報告（夜間想定含む）
- ⑤ 外部評価報告
- ⑥ 一年を振り返って 新型コロナの対応について

意見・感想等

- ① 阿用小学校体育館入口にスロープがあつて良かった。体育館へ避難してもらう際に寝たきりの方の対応はどのようにしたら良いか？と課題があつた。寝たきりの方は避難受入れ場所が福祉施設になると思う。日中と夜間の対応では職員の人数に違いがあるので夜間は対応が困ると思う。
- ② ご利用者の方にも参加して頂いた。運営推進会議の報告で人材不足が深刻となっていることより、どの事業所も深刻になっている。もっと現場の状況を把握して改善して欲しいと委員の方が行政職員の方へ要望された。
- ③ 活動面で毎年恒例の花火見物・誕生会・阿用小学生とのよりない贈呈式・尺の内公園でのイベント参加の報告であつた。
- ④ 訓練後の課題より、地域への協力で阿用地区の消防団と連携を取り今後は自衛消防訓練等を企画していこうと思っている。同時に地域の方々にも協力を得られるように日頃より関係作りが大事である。
- ⑤ ここは来やすい雰囲気であると思いますよ。というご意見を頂いた。外部評価委員の方より、○運営推進会議の在り方○契約書(ご利用者及びご利用者代理人の権利)○会議事録の見る事、見せる事の努力○理念に対して意識を持つことを指摘された。
- ⑥ 新型コロナに関しての話題となった。デイサービスのご利用者で独居の方はどのように対応したらよいか悩むところでもあるとケアマネさんより。

2019 年度通所介護事業報告書

カルチャーセンター あおぞら
管 理 者 石原 正樹
主 任 岩田 詩穂

2019 年度通所介護事業について下記のとおり実績報告いたします。

記

1. 事業の実績

カルチャーセンターあおぞら

開所日数 309 日
延べ利用者数 3,482 人 (前年度 3,346 人)
一日平均利用者数 11.3 人 (前年度 10.9 人)

2. 主な行事等

4 月 花見 (木次・三刀屋・大東桜名所)	10 月 遠足 (吉田村)
6 月 笹まき作り	12 月 望年会 そば打ち
7 月 遠足 (ホーランエンヤ伝承館)	1 月 初詣
8 月 七夕会	2 月 節分宮参り
9 月 敬老会	3 月 花見

その他 8・12 月避難訓練 (火災) 令和 2 年 2 月合同家族会

主な活動 昼食作り、牛乳パック椅子作り、ちぎり絵、編み物、ドライブ
畑作業、庭の手入れ、スポーツ等

3. 総評

利用者数は前年度より伸びたが、要介護の方も更に増え重度化が顕著になってきた。あおぞらの家へ移行された方も数名おられた。また、カルチャーとの併用の方もあり、一度に移行せず徐々に移行されるパターンが目立った。

今年度は夏場の熱中症や冬場の寒暖差の大きさなどで体調を崩される方は少なかった。自宅での転倒はあったが入院にまで至らず年間を通して健康に過ごされ大変良かった。また、ショートステイを希望される方が更に増えてきたが、スポット利用で空きを埋めることが出来た。

年明けからの新型コロナウイルスによる感染予防では本部からの統制のとれた対策で大事に至らなかった。他事業所との連携もできていた。この間、2 名の方が自主的に欠席され

るケースはあったが大半の方が変わらず利用を継続された。長期に休まれた方からも、家にいると頭がおかしくなるので出た方が良いですわ、と声を頂き改めてデイサービスの必要性や役割を感じる一年でした。

4. 重点目標

- ① ドライブや散歩等の外出の機会を増やします。
- ② 畑仕事がしやすいように環境を整備します。
- ③ 脳トレ、運動、ゲームを多く取り入れ認知症の予防に努めます。
- ④ 転倒防止のため体操を工夫します。
- ⑤ ボランティアさんの参加を更に増やします。

評価反省

- ① 散歩は例年程度だったが、ドライブは多くできた。
- ② 環境整備はできなかった。
- ③ オリジナルのゲームを作り楽しんで頂けた。
- ④ 毎日の体操に下肢を柔軟にする運動を取り入れ転倒予防に役立っていると思う。
- ⑤ ボランティアの希望も多く利用者様にも多角的に楽しんで頂くことができました。年度末はコロナの影響もあり中止にしました。

2019年度 生活介護事業報告書

生活介護事業所 野の花
管理者 難波由利子

2019年度生活介護事業について下記のとおり実績報告します。
記

1 事業の実績	2018年度	2019年度
開所日数	<u>263日</u>	<u>263日</u>
述べ利用者数	<u>5,402人</u>	<u>4,958人</u> (日中一時・302人含む)
1日平均利用者数	<u>20.5人</u>	<u>18.9人</u>

2 年間行事

いちご狩り・奉仕作業&焼肉・笹巻・買い物訓練・パン作り・遠足
味噌作り・そば打ち・ぶどう狩り

3 総評

新規はあるが、定期利用の利用者の施設入所、長期入院で利用者が減少した。
職員の入れ替わりが多かったが利用者には大きな混乱がなく良かった。
ひだまりカフェは楽しんで参加でき利用者の自信にも繋がった。
利用者同士が慣れてきてトラブル・わがままが多くなってきたが、その都度お話し
することで本人が安心できる関りができた。

4 重点目標評価

重点目標

- ① 個々の可能性を引き出す支援をする。
- ② レクリエーションの充実を図る。
- ③ 職員の一人一人の働く意識を高める。
- ④ 障がい特性の研修をする。

評価

- ① 小さなできることを見つけることで本人の自信に繋がった。
- ② 出来ている。
- ③ 出来ている。
- ④ 1回しかできなかったのを定期的にしていきたい。

2019 年度相談支援事業報告書

相談支援事業所 あおぞら
管理者 森山 史朗

2019 年度生活介護事業について下記のとおり実績報告いたします。

記

1. 事業の実績

相談員 2 名（常勤専従 1 名、常勤兼務 1 名）、事務補助員 1 名（常勤兼務 1 名）

- ① 特定相談支援事業 計画相談支援（サービス等利用計画の作成・モニタリング）
開所日数 257 日
契約者数 34 人（2018 年度 31 人）
計画作成数 8 件（2018 年度 13 件）
モニタリング数 147 件（2018 年度 121 件）
- ② 一般相談支援事業 960 人（2018 年度 762 人）
- ③ 地域移行 0 人・地域定着 0 人
- ④ 障害支援区分認定調査委託事業
認定調査数 9 件（2018 年度 12 件）
- ⑤ その他
電話相談・面接相談等
雲南市自立支援協議会相談支援部会・モニタリング審査会
雲南市自立支援協議会地域生活支援部会
雲南市圏域高次脳機能障害者ネットワーク会議
障がい者就業・生活支援センター事業連絡会議

2. 総評

今年度より新単価体系に移行し報酬請求では基本単価が下げられ代わりに各種加算をとる仕組みのため多くの事務作業が必要となった。収入は前年度より増加したが、収支は若干のマイナスとなった。

障害児相談の新規や養護学校卒業に伴う新規の相談など多く、初めて関わる機関等も多く、調整等が大変であった。

また、2 月以降はコロナ対応のため、ショートステイが中止となるなどサービス調整が必要になるケースや利用者の就労就学にも影響が出て調整が必要になるケースなどの対応に追われた。

9 月以降は、相談員の事務負担の軽減と将来の人材育成のため不定期で相談支援事業所の職員の追加配置をした。

相談員は、雲南圏域障がい者総合支援協議会の開催する会議やワーキングチームに参加し、地域課題解決に協力した。

重点目標

- ① 障害特性を理解し、障がい者の意思と人格を尊重した相談支援を行う。
→多くの研修に参加し、障がい特性の理解に努めたうえで、家庭訪問などで利用者の要望を聞き取りながら支援をおこなった。
- ② 職員研修
→雲南市の相談支援事業部会の開催する研修などに参加した。
- ③ 他事業所との連携を深め、より質の高い支援ができるよう努める。
→初めて関わる養護学校や事業所などを訪問し連携を深める事が出来た。

2019年度 障害者共同生活援助事業報告書

指定共同生活援助事業所 「風車の舎」
管 理 者 大 島 由 嗣
サービス管理責任者 原 悠 将

2019年度 障害者共同生活援助事業について以下のとおり報告いたします。

記

1. 事業目的 障害者共同生活援助事業の目的は、住み慣れた地域において共同生活をのぞむ障害者に住居（グループホーム）を提供し、食事の提供、相談その他日常生活上の援助をおこなうことを目的とする。

2. 事業内容

- ①食事援助 ②家事援助 ③服薬管理指導
④金銭管理指導 ⑤余暇活動 ⑥相談業務

3. 事業実績

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用延人数	150	155	150	155	152	150	155	150	155	151	145	155	1822

稼働率 0.996

4. 年間行事

該当月 誕生会
4月 花見会
8月 バーベキュー
12月 忘年会

5. 重点課題

- ・環境整備と衛生管理
- ・利用者が相談し易い環境作り
- ・相談支援事業所及び日中活動事業所との情報共有
- ・支援計画およびモニタリング

6. 総評

昨年度と同様、大きな変化はなく、5名の利用者は穏やかに生活されていた。精神的な変化や生活については相談事業所や家族の方と連携をし、情報の共有をしたうえで対応を行うようにしていった。「利用者が相談し易い環境作り」の一環として世話人の発案により新しい行事も少しずつ増えてきたところだったが、年度末のコロナ感染症によりすべての行事の中止を余儀なくされている。またこれに合わせて感染予防対策を強化し、世話人の消毒業務、利用者の検温、などを行い、今まで健康管理や感染予防については個人に委ねていた部分を、一部義務・業務化していった。調理担当者が4名・世話人6名が定期的にミーティングを行い、情報の共有を図り細かい対応がしやすい体制を整えてきた。従って、利用者のニーズに応じた支援計画およびモニタリングを図る体制となってきた。

2019年度 就労継続支援B型事業 事業報告

尺の内農園

管理者 森山史朗

2019年度就労継続支援B型事業について下記のとおり実績報告します。

記

- 1 事業の実績 2019年度（前年度）

開所日数	259日（126日）
述べ利用者数	1,458人（402人）
1日平均利用者数	5.6人（3.2人）

- 2 年間行事
いちご狩り、外食、釣、プール、トロッコ列車、遠足
熱中症研修

3 総評

事業開始より2年度目に入り、利用者も若干増加したが平均利用者が5.6人と伸びは予定より低調であった。これは、全国的な障がい者雇用の拡充が影響したこともあるが、尺の内農園の作業が屋外であることが多く就労内容合わない方や利用者間トラブルで中止となるケースがあったことなどである。今後は室内作業の充実や個別に丁寧な就労支援をすることが重要である。

また、職員採用の面では半期で2名の職員が退職となり福祉と農業の両方が求められる就労支援事業の雇用の難しさに直面した。

お茶事業については、今年度より補助金事業により和紅茶の加工販売に取り組み、初年度で約100kg生産し、パッケージをデザインし商品化して、市内のスーパー等で販売を開始した。3年晩茶は今年度、約300kg生産した。介護事業者向けに業務用として販売するなど販路の拡大に努めた。

葡萄園事業は2019年3月に植樹して以来、順調に苗が生育した。年間の作業も奥出雲葡萄園さんの指導の下、利用者の皆さんも経験することができた。

また、行政や民間からの委託事業を請け負った。主な委託業務は以下の通り。

- ① 株）ホシザキ 工場内公園等の除草作業等
- ② 雲南市委託業務 河川敷除草作業
- ③ 内職業務（食用押し花加工、箱作り、シール貼り等）

主な補助事業

ハード面 スポットクーラー2台の設置

ソフト面 新商品開発「和紅茶」

専門家派遣・パッケージデザイン・食品表示・リーフレット作成

4 重点目標

- ① 障害特性の理解→研修を実施
- ② 農業技術の取得→刈払機取扱作業者に対する安全衛生講習受講
- ③ 就労支援技術の研修→島根県障がい者就労事業振興センター実施の研修受講
- ④ 事業の周知と利用者の獲得→養護学校の実習受け入れや、親の会の視察研修の受け入れなどを積極的に受け入れた。